

令和 5 年 4 月 17 日現在

機関番号：34418

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K03167

研究課題名（和文）教師の真正な学びを促すダブルループ型授業研究の開発と評価

研究課題名（英文）Development of a double-loop lesson study that promotes teachers' authentic learning

研究代表者

新坊 昌弘（Shimbo, Masahiro）

関西外国語大学・英語キャリア学部・教授

研究者番号：90566308

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ある学校を対象に、ノートを通じて子どもたちの長期的な学びのありようをみとり、それをもとに教員が学びあうという実践を行った。こうした取り組みの効果についてインタビューを重ねたところ、子どもの学びに対する捉え方や、それを生かした授業づくりについて徐々に変化が起きていること、そして、長く積み重ねることで、そうした点が概念的なレベルで変容していることもわかった。教師としてのそれぞれのあり方や考え方が変わっており、一定のダブル・ループ型の学びが生じていたと判断できる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで、校内研究は教師の学びの中心であると見られてきたが、その一方で形骸化等も指摘されてきた。個別の授業の改善や、その授業の中で子どもの学びに焦点をあてることが多く、教師のあり方や考え方の変容につながるような学びになっているかは問われて来なかった。本研究はノートの観察を通じて、子どもの真の学びの姿に迫ることや、教師自身のあり方や考え方が変容するような学びを実現することが、一定程度達成できたと考えられる。校内研究の意義やあり方について、また、教師の学びの新たな可能性を示せたという意味で学術的な意義を有するとともに、実践の具体的な方法について開発を進めたという意味で、社会的な意義を有すると言える。

研究成果の概要（英文）：In this study, we promoted a practice in which teachers observe children's long-term learning through their notebooks. To develop that view, we organized a dialogue in which teachers collaboratively looked at children's notebooks. And we conducted multiple interviews to analyze the effects. It was found that there was a gradual change in the way teachers perceive children's learning and in the way classes were created based on that learning, and that these changes have reached a conceptual level after a long period of practice. The way of being and thinking as a teacher itself has changed. It might be concluded that a certain double-loop learning process has taken place.

研究分野：教師教育

キーワード：授業研究

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

### 1. 研究開始当初の背景

教師の真正な学びは、実践をデザインし、経験を省察、改善し、それらを繰り返す円環型である。日常の経験から学び、そこから授業実践を創造し、成長することが求められる（コルトハーヘン 2012）。加えて、授業がコンテンツからコンピテンシーベースに転換するなかで、自律的に学ぶ子どもを育てるために、探究などの教育実践を創造的に展開していく必要がある。そのためには、子どもの学びや授業そのもののあり方を問い直すダブル・ループ型（Argyris & Schön 1974）で学んでいくことが教師には求められる。授業研究は、これまで教師の学びに大きな成果をあげてきたが、一方で、特定の授業での子どもの短期の学習評価や次の授業の改善の手立てを対象に省察が行われることが多い。より長期的な子どもの学びに視点が向かず（岸野 2019）、それによりシングル・ループに陥りやすいという課題がある（木村 2019）。我が国において長らく教師の力量形成に授業研究が大きな役割を果たしてきたという歴史（臼井 2009）に鑑みても、教師の真正な学びを促すダブル・ループ型の授業研究の開発を試みる必要がある。

### 2. 研究の目的

本研究では、教師の真正な学びを促すダブル・ループ型の授業研究の開発を行った。そのために、①授業デザイン、②子どもの学びに対する長期的な視点の課題解決、という2点から検討した。

まず①については、事前検討会重視型授業研究（中堂 2017）に着目した。事前検討会重視型授業研究は、事前検討会を重視することで、校内の教師が協働で授業をデザインし、子どもの姿に関する語りをベースとした省察（木村 2019）を引き出し、円環型の学びを実現している（Choshi et al 2019）。

次に②についてであるが、石井（2018）は、子どもの学びを長期的に捉え、ダブル・ループ型の学びを促すために、事例研究（子どもの学びや教室での出来事の解釈を目的とした対話の機会）が有効であると指摘している。よって、事例研究をベースに、授業実践の創造・改善に取り組むことで、ダブル・ループ型の学びが実現できると考えた。子どもの学びに関する事例研究には、ノート記録を活用することにした。思考力・判断力の重要性が高まる中で、子どもの認知プロセスを表出させるノート指導が盛んになっており、実際、子どものノート記録をもとに授業を振り返ることで、1時間の授業だけでなく、単元を通して授業を考えることができるようになったという報告（小柳 2018）もあり、ゆえに、ノート記録を事例研究に活用することにした。

以上をふまえ、本研究では、ノート記録を活用した事例研究をもとに、ダブル・ループ型の学びが実現できる授業研究の開発を試みた。

### 3. 研究の方法

本研究では、上記の形の授業研究を開発するとともに、その効果等について分析しつつ、実践を継続的に試みることにした。

具体的には、2017年度から事前検討会重視型授業研究（中堂 2017）に取り組む大阪府内のある小学校を対象に、2018年度から実践を試みることにした。加えて、教職員を対象に、実施1年目の年度末（2019年3月）、2年目の年度末（2020年3月）、4年目の年度末（2022年3月）にインタビューを実施した。この実践について感じていることなどを中心に、半構造化インタビューを実施した。インタビューデータについては、佐藤（2008）を参考に、コーディングおよびカテゴリ化をおこなった。なお、当初の予定では、より幅広い実践や、より多くの回数のインタビューを行うことを計画していたが、新型コロナウイルスの影響でそれはかなわなかった。分析の結果について整理し、日本教育工学会、World Association of Lesson Study 等の学会で発表を行った。

### 4. 研究成果

#### (1) ノート記述を活用した実践の概要

児童のノート（算数に焦点化した）の日々の授業における自力解決場面や振り返りの段階でのノート記述を確認することで、子どもの学びを見取ることにした。その際、学びの様子が表出している部分に色分けしながら線をひくなど、具体的な方法についても教師間で共通理解を図り、日常的に取り組んだ。また、校内研究の場で、全教職員で共通のノートについて学びの見取りを行い、その結果を比較するとともに対話を行うことで、見取る基準について共有を図った。日常的なノートからの学びの見取りは継続的に行い、校内研究におけるこうした対話と交流を定期的に繰り返していった。

(2) 実践1年目で起きたことについての分析結果

実践一年目の年度末に実施した調査とその分析では、表1のような結果が出た。ノートを用いた実践を行うことで、「子どもの学びの見方の変容」が起き、それが「授業の変容」につながり、「子どもの変容」を引き起こしている可能性があることが考えられる。子どものノートにより、子どもの学びを見取ること、それを他の教師と共有していくことで、教師は、子どもの学びの見方を獲得し、その見方も深まっていったと考えられる。

表1 1年目年度末のインタビュー結果

大カテゴリ	小カテゴリ	具体的な内容	人数
子どもの学びの見方の変容	学びの見方の獲得・深まり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ノートの客観的な見方の獲得</li> <li>・量的な見方から質的な見方への変化</li> <li>・テスト以外の評価方法の重要性への気づき</li> <li>・基準を持つことへの重要性への気づき</li> </ul>	7
	学びの見方の交流・共有	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これまでの評価の視点のばらつきに気づく</li> <li>・評価基準づくりにおける互助作用の発生</li> <li>・評価基準に基づいても、なおみられるばらつき</li> <li>・日常の中での、子どもの学びに関する交流</li> <li>・こうした取り組みを通じた人間関係の深まり</li> </ul>	6
	見とりの日常化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ノート評価に対する慣れ</li> </ul>	1
	継続的な見とり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学年を越えた子どもの学びの追跡</li> </ul>	1
授業の変容	指導と評価の一体化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・単元計画の重要性についての気づき</li> <li>・次時の授業への反映</li> <li>・次時の授業での子どもの確かな見とりへのつながり</li> <li>・自己の授業の省察</li> <li>・ゴールの子どもの姿を想定した授業づくり</li> </ul>	7
	他教科への広がり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・専科教員としての活用</li> </ul>	1
子どもの変容	子どもの変容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自身の学びに対する振り返りの観点の獲得</li> <li>・書けない子ほど書けるようになった</li> <li>・他者の考えに対する意識の高まり</li> </ul>	10

(3) 実践2年目で起きたことについての分析結果

実践2年目の年度末の調査では、表2のような結果が析出された。持続的な取り組みの結果生じたと考えられる。1年目と比較して、「授業の変容」の「授業観の変容」と、「組織に対するメタ認知」の「組織の良さに対する気づき」のカテゴリが新たに見られた。「授業観の変容」については、子どものノートを見取ることにより、自身の授業に対する考え方が問い直されたということである。これまで行ってきた自身の授業の型に自覚的になり、授業のありようを考えるとこの様子が見られた。「組織の良さに対する気づき」については、今回の実践を通して、自身の組織について再認識、特に、組織の良さについて気がついたと考えられる。

表2 2年目年度末のインタビュー結果

大カテゴリ	小カテゴリ		具体的な内容
	1年目	2年目	
子どもの学びの見方の変容	学びの見方の獲得・深まり	学びの見方の獲得・深まり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ノートを書く量や綺麗さではない</li> <li>・学びのプロセスを見るようになった</li> </ul>
	学びの見方の交流・共有	学びの見方の交流・共有	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの学びについて語り合う</li> <li>・ノートを見せることに抵抗がない</li> <li>・ノートをもとにして語り合う</li> <li>・日常の中での、子どもの学びに関する交流</li> <li>・ノートを通じて、授業の話をするようになった</li> </ul>
	見とりの日常化	見とりの日常化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ノートからの学びの見とりに対する慣れ</li> </ul>
	継続的な見とり	継続的な見とり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・違う学年の子のノートを見ながら学びの様子を考える</li> </ul>
授業の変容	指導と評価の一体化	指導と評価の一体化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ノートを見ながら授業のあり方を考えるようになった</li> <li>・ノートを見て自分の授業を変えるヒントをもらった</li> </ul>
	他教科への広がり	他教科への広がり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・算数だけでなく他の教科でも焦点化して書いてもらうようにした</li> </ul>
子どもの変容	子どもの変容	子どもの変容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分で考えるようになった</li> <li>・自分でまとめられるようになった</li> </ul>
組織に対するメタ認知		組織の良さに対する気づき	<ul style="list-style-type: none"> <li>・みんなでやっというところ、うちの学校の雰囲気があったからこそ話しやすいことが大きかった</li> </ul>

(4) 4年間の実践の結果で生じたこと

4年間の実践を終えた後のインタビューでは、授業づくりのあり方や子どもの学びに対する捉え方に変容が生じていることに関わる発話があった。研究を通じて、ノートを活用して研究してきたことで、単に授業のやり方や作り方だけでなく、より深い部分での概念的な変容が生じている可能性がある。

(5) 結果のまとめ：成果と課題

本研究では、ノートを活用して子どもの長期的な学びの様子をみとり、それをもとに研究を行うという実践に取り組んだ。短期的な子どもの変化や個別の授業の改善というこれまでの限界をのりこえ、深い気づきを通したダブル・ループの学びが生じることを企図したものである。実践とその影響についての分析を通じて、当初は授業や子どもの変容というこれまでの授業研究でも生じたことが起きていたが、時間を経るにつれて授業そのものについての捉えや、当初は持っていなかった組織に対する気づきが生じ、最終的には授業づくりのあり方や子どもの学びに対する捉え方などの部分で概念的な変容が生じている可能性が考えられる。こうした点は、教師としてのそれぞれのあり方や考え方のレベルでの変容と捉えることができる。一定のダブル・ループ型の学びが生じていたと判断できるのではないだろうか。長期的かつ日常的な子どもの学びの様子に目を向け続けること、そして、それを改善すべく検討を続けていくことが重要であり、そして、そのためにノートを活用することは有効であった可能性が高いと言える。

今後は、まずは最終的な変容がどういった意味を持つのか、といったより深い点での分析が必要になるであろう。また本研究の限界にも目を向ける必要がある。こうした変容が起きたのは一部の教員であることや、変容が生じるまでには一定の時間がかかっていることも認識しなければならない。改めてダブル・ループ型の学びを促すことの難しさも明らかになったと言える。本研究ではある学校を事例として行ったが、より事例を蓄積しつつ、実践のポイント等に関わる知見をさらに積み上げていくことが今後必要になるだろう。

<引用文献>

- ①Argyris, C., & Schön, D. (1974). *Theory in Practice Increasing Professional Effectiveness*. San Francisco: Jossey-Bass Publishers.
- ②コルトハーヘン.F(訳)武田信子 (2012) 教師教育学. 学文社, 東京
- ③木村優(2019)モードシフト. 木村優, 岸野麻衣編, 授業研究実践を変え, 理論を革新する. 新曜社, 東京
- ④岸野麻衣(2019)教師を育てる. 木村優, 岸野麻衣編, 授業研究実践を変え, 理論を革新する. 新曜社, 東京
- ⑤Daisuke Choshi, Sumiyo Nakado, Masahiro Shimbo, Takehiro Wakimoto(2019) Development of lesson study focused on advance consultation session: effects and problems occurring in the first year of starting. World Association of Lesson Study, (Springer) 63
- ⑥石井英真(2018)教師の学びと成長とは?～リフレクション入門～. 授業づくりネットワーク編集委員会編, リフレクション大全. 学事出版
- ⑦中堂寿美代、脇本健弘、新坊昌弘、町支大祐、麥田葉子(2017)学び続ける学校組織への変革を目的とした事前検討会を重視する授業研究の開発. 日本教育工学会第33回大会講演論文集, 673-674
- ⑧小柳和喜雄、井上龍一、真弓英彦 (2018) 授業研究における e-ポートフォリオの活用. 奈良教育大学次世代教員養成センター4, 153-157
- ⑨佐藤郁哉(2008)質的データ分析法—原理・方法・実践. 新曜社, 東京

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 新坊昌弘 脇本健弘 町支大祐 中堂寿美代 河野雄
2. 発表標題 子どものノート記録をもとにした教員による事例研究の実践
3. 学会等名 日本教育工学会春季全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 新坊昌弘 脇本健弘 町支大祐 中堂寿美代 河野雄
2. 発表標題 子どものノート記録をもとにした教員による事例研究の持続的実践に関する検討
3. 学会等名 日本教育工学会秋季全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Takehiro Wakimoto, Masahiro Shimbo, Daisuke Choshi, Sumiyo Nakado, Yu Kawano
2. 発表標題 Research on a Lesson Study based on Children's Notebook Records
3. 学会等名 World Association of Lesson Studies 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 脇本健弘 町支大祐	4. 発行年 2021年
2. 出版社 第一法規	5. 総ページ数 241
3. 書名 教師が学びあう学校づくり ―「若手教師の育て方」実践事例集―	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	脇本 健弘  (Wakimoto Takehiro)  (40633326)	横浜国立大学・大学院教育学研究科・准教授   (12701)	
研究分担者	町支 大祐  (Choshi Daisuke)  (40755279)	帝京大学・公私立大学の部局等・講師   (32643)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	中堂 寿美代  (Nakado Sumiyo)	枚方市立川越小学校・校長	
研究協力者	河野 雄  (Kawano Yu)	大阪府教育センター・指導主事	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------